

コメントと総括

田中, 英資
福岡女学院大学人文学部

<https://doi.org/10.15017/2344810>

出版情報 : 九州人類学会報. 43, pp.5-10, 2016-11-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

コメントと総括

田中 英資（福岡女学院大学人文学部）

I はじめに

文化遺産研究の進展に大きな影響力をもった英国の地理学者デイヴィッド・ローウェンサールは、その著書『Heritage Crusade』（1998）のなかで「突如として遺産が各所に出現している（All at once, heritage is everywhere.）」と書いたことがあるが、日本では近年、「富士山」、「富岡製糸場」、「明治日本の産業革命遺産」と、UNESCO 世界遺産リストへの登録が毎年続いていることもあり、各地で「（世界）遺産ブーム」とでも言えるような状況となっている。そのなかでも九州は特にこのブームに乗っている地域と言えるだろう。2015年に「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録された高島（軍艦島）や三池炭鉱、ICOMOS から登録延期の見通しが出されて「取り下げ」ということにはなったものの、2016年の世界遺産登録に向けた動きが進んでいた「長崎の教会群」と、本セッションの個別発表で紹介された事例に加えて、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が世界遺産暫定リストに追加掲載され、2016年1月には日本政府からユネスコへ正式な推薦書が提出されている（文化庁2016）。

近年の文化遺産研究では、過去から受け継がれてきた有形もしくは無形の文化がいかに関「文化遺産」、すなわち保護・保全の対象とみなされていくかという点に焦点があたってきた。このなかで文化遺産とは、単に過去から受け継がれて、将来にわたって保護・保全されるべき対象というよりも、文化遺産とされたものを介して様々な集団が結びつけられる、あるいは、文化遺産とされたものを様々な集団の利害に巻き込んでいくような過程（プロセス）として考えられるようになってきている。本稿ではこうした既存研究の流れの中で、本セッションの個別発表がどのように位置づけられるかについてみていく。

II 社会的過程としての文化遺産

文化遺産に関する先行研究（考古学的なものであれ、人類学的なものであれ）においては、文化の保護という言葉のなかで文化遺産の概念がいかに関有形・無形の文化をひとまとめにするのに動員されてきたのかに焦点があてられてきた（例えば、Brown 2004）。それを通し

て、文化遺産とは非常に近代的な関心から生まれた社会現象であって、「遺産」という価値は、過去から受け継がれてきた有形・無形の文化に生来のものではなく、あとから付与された象徴的な価値であるという考え方が広く受け入れられるようになってきている。

ひとたび「遺産」という価値がみとめられた有形・無形の文化は、保存・保全の対象となる。そこで問題となることは、「文化遺産」とは誰にとっての守るべき価値なのかという問題である。例えば、文化遺産が特定の民族・国民 (nations) のアイデンティティに結びつけられ、文化遺産がその民族や国民にとってかけがえのないものとみなされる。ただし、「想像の共同体」(Anderson 1991[1983]) としての国民国家の枠組みにはまりきれないマイノリティ集団にとっては、そうした国民の遺産が彼らにとっての「遺産」とは限らない。一方、世界遺産リストで知られる UNESCO や文化遺産保護に関わっている国際的 NGO にとって、過去から受け継がれてきた文化は、特定の集団にとってだけでなく、人類全体にとってかけがえのない「遺産」と考えられている。また、文化遺産とみなされる過去の痕跡は過去の情報のデータベースという意味で、考古学にとって文化遺産の保護は、職業的な「責任」とみることができる (Cleere 2005)。

こうしてみると、文化遺産とされた有形・無形の文化に利害関心を表明する人びとにとって、「遺産」の意義は必ずしも一致していない。UNESCO 世界遺産の発想は、個別の国民国家が国民意識の醸成を目的として文化遺産を保護しようとする発想とは異なるし、それら国家、あるいは国際的な文化遺産のとらえ方は、そうしたものが地域社会のなかでのとらえ方とも異なることが多い。もっといえば、文化遺産に利害をもつ様々な集団が互いに互いのとらえ方を理解しているとも限らない。ただし、アメリカ合衆国やオーストラリアの先住民の権利運動と行政による遺跡管理をめぐる衝突を研究した考古学者ローラジェイン・スミスは、「文化遺産とされるものに正しい定義を与え、そうした定義上の文化遺産の性質や意味について誰が語る能力があるかを定める」支配的な言説があり、それがそれ以外の様々な文化遺産に対するとらえ方を周縁化してきたと指摘している (Smith 2006: 29)。そして彼女は、そのような支配的な言説のことを「権威化された言説 (authorized heritage discourse)」(Smith 2006) と呼んでいる。

「権威化された言説」に注目することによって見えてくるのは、文化遺産の扱い方において誰がその文化遺産の価値を代表しているのかという問題である。スミスによれば、その権威を代表するのは、「過去のスポークスマン」たる考古学者や人類学者といった文化遺産の専門家である (Smith 2006: 29)。スミスの「権威化された言説」の指摘に代表されるように、近年の文化遺産研究では、文化遺産の保護に関する中心的な言説と文化遺産の専門家たち

は共犯関係にあり、彼らの知識こそが「権威化された」文化遺産の解釈となっていることが指摘されるようになってきている (Bryne 2009; Fog Olwig 1999)。そして、こうした既存研究が明らかにしたことの結果として、文化遺産とされたものに対する多様な解釈が認められるべきであるとされるようにもなった。そのため、考古学者や人類学者といった文化遺産の専門家たちのとらえ方はもはやそれ以外の利害集団のとらえ方に優先するという前提は崩れつつある (Meskell 2009; Meskell and Pels 2005; 関 2014 など)。

さらにいえば、このような文化遺産に対する理解の多様性の認識によって、文化遺産は、単に客体化された何かというよりも、そうみなされた有形・無形の文化と、それをめぐる諸集団の交渉という社会的な過程として見直されるようになってきている (Breglia 2006; Harrison 2013 など)。このことはまた、文化遺産は、過去から受け継がれてきたものをめぐる様々な集団の間の衝突も含んだ相互交渉のなかでたち現われてくるものであることも意味している (Harrison 2013)。

ひとくちに文化遺産といっても様々なとらえ方があるなかで、支配的な言説と呼ばれるようなとらえ方は文化遺産に利害関心を持つ様々な主体の動きに大きな影響力をもってきた。また、文化遺産に関して支配的な言説が影響力をもつ一方、それに対抗する様々な次元の様々な主体の動きが出てくるということは、見方を変えれば、文化遺産をめぐる問題は、その地域社会だけの問題にとどまらず、ナショナルの次元やグローバルな次元の政治・経済、そして文化の問題にも結びついていくということでもある。ローカル、ナショナル、グローバルという多元的な政治・経済的利害関係が複雑に絡みあう状況を如何に記述し、それをどう理論化していくかが現在の文化遺産研究の課題となっている。

本セッションの4つの発表の内容は、観光とそれに伴う地域活性化に有用なある種のブランドとして喧伝される「世界遺産」というグローバルな枠組みが国と地域、あるいは地域のなかでの文化ポリティクスにどのような影響を与えてきたかという問題をみていくものだった。その意味で、ここまで述べてきた社会的過程として文化遺産をみる文化遺産研究の議論を深化させるものだったと評価できる。以下、個別発表に対するコメントを述べたうえで、セッション全体について総括する。

Ⅲ 個別発表へのコメント

まず、木村発表では、空間領域の社会的な構築過程あるいは政治経済的な構造化を論じる

「スケール (scale)」概念¹を導入しつつ、ユネスコの世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である「軍艦島」を事例として、ナショナルな枠を飛び越えてグローバルな価値づけ (= 「世界遺産」) を目指そうとする地域社会の動きとその結果についての考察がなされた。特に、軍艦島を地域資源として注目した「地元」が「世界遺産」というグローバルな枠組みを志向した結果、「明治日本」というナショナルな表象の強化につながっていったことを明らかにされた。「世界遺産」という文化表象をスケールのポリティクスという観点でとらえることで、日本社会における中央と地方の関係に内在する構造的な歪みが、特に中央政府に対する地方 (= ローカル) な主体の影響力の弱さを生んでいることを描き出した内容であった。

木村発表が扱った「軍艦島」と共に「明治日本の産業革命遺産」の構成資産となった三池炭鉱遺産群を事例とした永吉発表は、発表者自身がローカルな主体であり、かつ研究者でもあるという立場から、「世界遺産」という枠組みを目指したローカルな動きがいかになショナルな動きに取り込まれていったかをみていくものであった。永吉発表では、三池炭鉱遺産群がナショナルな価値観に取り込まれつつ世界遺産登録に進んでいった一方、それでもやはり「世界遺産」の枠組みからはこぼれ落ちた地域内の多様な価値や、記憶の継承が、ローカルな主体にとって大きな意義をもっていることが示された。

「世界遺産」のようなグローバルな価値をもちこんでも、中央の影響力に対抗することが難しいローカルな主体にとって、「遺産」とされた過去の痕跡やそれにまつわる記憶とは具体的にはどんな意義をもつのだろうか。筑豊地域における炭鉱の記憶の継承を事例に、こうした問題に目を向けたのが川松発表である。炭鉱の過去が誰によっていかに語り継がれているのか、特に、そうした記憶を語る枠組みが、北部九州を中心として進んでいた近代化産業遺産の世界遺産登録の動きとどのように連動し、どう変容してきているのかが明らかにされた。「世界遺産」という外部からの枠組みが地域に持ち込まれたことによって生じた語り手たちの様々な思いを織り込みながら、筑豊炭鉱の記憶は、世間話的「軽さ」のなかでざつくばらんに語り継がれている状況が浮かび上がった。

一方、池田発表は、「世界遺産」という外からの枠組みが観光と結び付けられて地域の中に入ってくることが、地域社会にいかなる影響を与えているかに焦点を当てていた。長崎・外海地方の教会群の世界遺産登録の動きを事例に、地域の中でのキリスト教をめぐる集合的記憶と、「世界遺産」や「美しい教会」を求める観光の集合的まなざしがせめぎ合う状況

¹ 近年、ディヴィッド・ハーヴェイ (Harvey 2014) が遺産化の過程において「スケール」概念を導入することの意義を論じたことをきっかけに、文化遺産研究の分野で「スケール」から考察することに注目が集まりつつある。

を明らかにされた。また、池田発表では地域が外部からの新たな枠組み・価値観を求める動きと、教会を中心とした地域共同体内部の抱える問題とは表裏一体であることが指摘されており、キリスト教に関する固有の集合的記憶を受け継いできたローカルな主体の抱える課題が「世界遺産」という価値が持ち込まれることで浮き彫りになっていく状況も示されていたと考える。

IV 総括

本セッションの4発表それぞれの論点は異なるが、共通するのは「世界遺産」という外部からの、それもナショナルを超えてグローバルな枠組みがいかにローカルな価値づけとの間の衝突を生み、それがどのような形で結果に表れているかという点である。また、いずれの発表も、ある対象が「(世界)遺産」になる過程に焦点を当てており、その対象を介した主体間のせめぎ合いが議論の中心であった。質疑の時間でも、「世界遺産」に代表されるようなグローバルの価値の影響力の大きさと、それを利用しようとするローカル(地域住民、行政)やナショナルな次元の様々な主体のせめぎ合いに関して意見が交わされた。

質疑も含めた本セッションの議論からみえてくるものとして重要なのは、国民国家という枠組みのなかでの中央と地方の関係性(の歪み)であり、ナショナルを超えたグローバルな価値としての「世界遺産」がその関係性に持ち込まれることで生み出される新たな状況である。それは日本社会が抱える課題を浮き彫りにする。一方で、これら北部九州の事例から示される文化ポリティクスに関して、同じように世界遺産ブームに乗っている世界の諸地域の事例からはどのようなことがいえるのだろうか。国外の事例(例えば、質疑のなかで、日本同様に世界遺産ブームに沸き、利権問題にまで発展していると指摘のあった中国など)にも目を向け、日本の事例と比較検討することは、本セッションでの議論をさらに発展させることにもつながるだろう。

【参照文献】

Breglia, L.

2006 *Monumental Ambivalence: the Politics of Heritage*. Austin: University of Texas Press.

Brown, M.

2004 Heritage as Property. In K. Verdery, & C. Humphrey (eds) *Property in Question: Value Transformation in the Global Economy*. pp.49-68, Oxford and New York: Berg.

Bryne, D.

2009 Archaeology and the Fortress of Rationality. In L. Meskell (ed.) *Cosmopolitan Archaeologies*.

pp.68-88, Durham and London: Duke University Press.

Cleere, H.

2005 “Introduction: The Rationale of Archaeological Heritage Management.” In. H. Cleere (ed) *Archaeological Heritage Management in the Modern World*, pp.1–19.Oxford: Routledge.

Fog Olwig, K.

1999 The Burden of Heritage: Claiming a Place for a West Indian Culture. *American Ethnologist* 26 (2):370-388.

Harrison, R.

2013 *Heritage*. London: Routledge.

Harvey, D.

2014 Heritage and Scale: Settings, Boundaries, and Relations. *International Journal of Heritage Studies* 21(6):577-593.

文化庁

2016 『『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群』の世界文化遺産推薦に係る推薦書（正式版）のユネスコへの提出について（1月15日）

http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/2016011501.html

（2016年3月3日閲覧）

Meskel, L. (ed.)

2009. *Cosmopolitan Archaeologies*. Durham and London: Duke University Press.

Meskel, L. and Pels, P. (eds)

2005. *Embedding Ethics*. Oxford and New York: Berg.

関雄二

2014 『アンデスの文化遺産を活かす：考古学者と盗掘者の対話』臨川書店。

Smith, L.

2006. *Uses of Heritage*. London and New York: Routledge.

(2016年8月9日原稿掲載承認)